

ウェストミンスター
信仰告白書 神学

(Theology of the Westminster Confession of Faith)



ア. ウェストミンスター信仰告白書の歴史

－神学的 (Historical－Theological) 背景

ウェストミンスター総会が構成され、ウェストミンスター信仰告白書が作成されたのは、あくまでも、政治－社会的な背景によることでした。なぜなら、ウェストミンスター信仰告白書を始めとして、礼拝規範、大教理問答書と小教理問答書は、議会の命令によって作成されたからです。1638年にスコットランド長老教会は、英国国教会の祈禱文書の使用要求に対して正面に反対しました。その当時、英国の王であったチャールズ1世は、スコットランドを攻撃するために議会を召集しましたが、議会の否定的な態度によって延期されました。その後、スコットランド長老教会と英国国教会は、1640年に再び衝突しました。チャールズ1世は議会をもう一度招集しようとしたが、議会は王に対して拒否しました。英国議会は、王と政治－社会的なことは勿論、宗教的な問題でも衝突していました。このような状況で、約15,000名のロンドン市民たちは、監督政治の廃止を要求する (Root and Branch) 誓願を下院に提出しました。誓願の内容は、監督政治によって誤りと無知が教会に簡単に入って来て、腐敗と乱用が深刻だということでした。¹ 従って、1641年11月22日に下院は、正しい教会政治形態を要求する抗議文書を王に提出しました。²

1 Alexander Mitchell, *The Westminster Assembly Its History and Standards* (Edmonton: Still Waters Revival Books, 1992 [1883]), 97.

2 William Hetherington, *History of the Westminster Assembly of Divines* (Edmonton: Still Waters Revival Books, 1991 [1856]), 90.

そして、1642年7月に議会は、教会と国家の改革を王に要求しました。勿論、王は、議会の要求に拒否しました。³ 1643年5月13日には、ウェストミンスター総会のための要求が下院に提出されました。議会は、王の反対を無視して、6月12日にウェストミンスター総会招集のための法令を制定しました。⁴ この法令は、ウェストミンスター総会の目的と、成すべきことについて明示されていました。総会の構成目的は、信仰の純粋性を立てるためであり、教会政治が完全に改革されなければならないこと、現状の教会政治は悪だとしたのです。従って、教会政治形態は聖書的でなければならないこと、すべての間違っただ教理は浄化されるべきこと、英国とスコットランド教会と外国改革教会との一致の必要性を語ったのです。⁵

そして、法令は、総会長としてウィリアム・トワイス (William Twisse) を指名しました。⁶ 法令に従って、ウェストミンスター総会は1643年7月1日に開かれました。総会の第一回目の作業は、「39箇条 (Thirty Nine Articles)」を改訂することでした。39箇条の改訂目的は、アルミニウス主義、ペラギウス主義、ローマカトリックの誤りを除去するためのものでした。⁷

改訂作業は、1643年10月12日に15条まで完成しました。16条の改訂を始めようとしたころ、信仰告白書と教理問答書の必要性についての議論が提案されました。ところが、1643年8月17日に採決された「厳粛同盟と契約 (Solemn League and Covenant)」は、信仰告白書と教会政治形態、礼拝規範、教理問答書の必要性を強調したのです。

3 William Hetherington, *History of the Westminster Assembly of Divines*, 93.

4 William Hetherington, *History of the Westminster Assembly of Divines*, 97.

5 William Hetherington, *History of the Westminster Assembly of Divines*, 97.

6 William Hetherington, *History of the Westminster Assembly of Divines*, 98.

7 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making* (Eugene: Wipac&Stock, 1973), 26.

そして「厳粛同盟と契約」は、改革信仰を保たせ、教理、礼拝、戒規、政治を神の御言葉に基づいて立て、信仰告白書として最高の改革教会の原本となるように、正しい教理に反する教皇制度や、迷信、異端、分離、不敬虔を根絶させるためのものだとしたのです。⁸

「厳粛同盟と契約」によって、9月25日から、スコットランドの神学者たちが総会に参加しました。そして、議会は、1643年10月に総会に対して、礼拝規範を作成するようとの指示を出します。結局、総会は39箇条の条項の改訂作業を放棄し、新しい信仰告白書と教理問答書、礼拝規範を作成する方向に旋回するようになりました。スコットランド総会の会員の参席によって、総会は、合意された改革神学を立てるための信仰告白書と教理問答書と礼拝規範を作成することになったのです。また、「厳粛同盟と契約」によって、最優先にすべき作業は、教会政治と礼拝規範を作成することでした。そのように決めた理由は、総会の会員たちの間に、その分野においてさらに多くの相違が存在していたからです。⁹

従って総会は、1643年と1644年の間に「教会政治と礼拝規範 (Form of Government)」を作成し、1644年8月20日に信仰告白書作成委員たちを指名し、委員たちは1646年11月26日に信仰告白書を完成しました。そして、議会の命令によって信仰告白書に証拠の聖書箇所を入れて、1647年4月5日にウェストミンスター信仰告白書が完成できました。¹⁰

8 Alexander Mitchell, *The Westminster Assembly Its History and Standards*, 102, 103.

9 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 27. 総会員たちは、長老派主義者、会衆主義者、監督主義者、エラスティアン Erastian 主義者と構成されました。(William Baker, *Puritan Profiles* 参照)

10 大教理問答書は1647年10月5日に完成され、小教理問答書はその年11月25日に下院に提出されました。

総会は、このような政治 - 社会的背景とともに神学的な背景を持っています。ウェストミンスター総会とは、改革神学内で、特定の主題について多様な観点を持った神学者たちの会議でした。例えば、総会員たちの中には予定論に対する立場が、墮落前選び説 (Supralapsarianism) を支持する者と、墮落後選び説 (Infralapsarianism) を支持する者たちが一緒に共存していました。従って総会は、最も重要な主題を決めなければなりませんでした。そのうえ総会は、特定学派の特定の神学などは意図的に避けてきました。実際的に、総会員だったエドワード・レイノルズ (Edward Reynolds) は、ウェストミンスター信仰告白書 3 章の内容を議論しながら、論争的なものやスコラ主義的なものは信仰告白書に入れないようにと勧めたのです。¹¹ しかし、総会は、改革神学でありながら普遍的に同意する範囲の中にあるべきでした。つまり、英国、スコットランド、アイルランドの改革教会は勿論のこと、大陸教会とも一致する改革神学の表現などを意図し、それを求めました。¹² 総会は 1163 回の会議を通して進められ、信仰告白書と教理問答書などで使用される用語の正確性と分明性のために、多くの時間を論争に費やしました。このような背景の中で作成されたウェストミンスター信仰告白書は、改革神学においては共同で合意できる文書です。つまり、ウェストミンスター信仰告白書は、共同の一致、あるいは、合意のために折衷された文書です。

一方で総会は、古典的な改革神学の範疇から逸れた誤りを除去するための目的も持っていました。その当時、英国教会に混同を与え、敬虔を脅かす誤りの中で最たるものと言えるのは、アルミニウス主義でした。

11 John Leith, *Assembly at Westminster. Reformed Theology in the Making*, 38,

12 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 38,

アルミニウス主義は、チャールズ1世・王と、ウィリアム・ラウド (William Laud) によって、政治的にも関連されていて、神学的混同を起こさせた神学でした。¹³ 勿論、総会員たちはアルミニウス神学の危険性を十分知っていたので、それらの誤りをはっきり示そうとしたのです。¹⁴

ウェストミンスター総会から見て、もう一つの確かな誤りは、ローマカトリック主義でした。これは、エリザベス女王時代 (1558–1603) から伝わって来た神学論争でした。それで総会員たちは、信仰告白書と教理問答書を通してローマカトリックの誤りをさらけ出し、排撃しようとしたのです。¹⁵ そして、ウェストミンスター総会の当時、第三の誤りは、道徳律廃棄論主義でした。道徳律廃棄論主義者たちは、恵みを強調しながら、神秘的な幻的体験に没頭していたのですが、ウェストミンスター信仰告白書は、それらの誤りについて指摘したのです。¹⁶ 総会は、このような誤り以外にも、イエス・キリストの神性を否定するソツツイーニ主義と、契約思想を反対する再洗礼派の誤りを深刻なものとして見て、このような誤りを絞め出すために、信仰告白書の文句などを注意深く叙述したのです。¹⁷

結局、ウェストミンスター総会は、英国の政治 - 社会的な状況と神学的状況の中で開かれたことなのです。

13 Samuel Logan, "The Context and Work of the Assembly" in *To Glorify and Enjoy God: A Commemoration of the 350th Anniversary of the Westminster Assembly* (Edinburgh: Banner of Truth, 1994), 33.

14 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 41.

15 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 42.

16 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 42.

17 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 43.

議会とチャールズ王との葛藤の構造の中で開かれますが、特にカンタベリー大主教であった、ウィリアム・ラウド (William Laud) によって神学的なものになります。つまり、英国国教会が監督政治を支持していて、それを主張したラウドの専横によって、議会と王が対立するようになり、ラウドはアルミニウス主義を支持していた者として、ウェストミンスター総会が開くようにさせ、神学的背景を提供したことになります。¹⁸

それで、ウェストミンスター総会は、誤りを除去し、純粋な改革信仰を保存させ、さらに積極的に改革神学を立てようとする努力をすることになります。その実際的な法案は、ウェストミンスター信仰告白書と礼拝規範、そして、教理問答書などを作成することでした。従って、ウェストミンスター総会のこのような背景によって作成されたウェストミンスター信仰告白書は、改革神学の一致は勿論、神学の領域においても正確さと、明らかなさ、包括的な叙述を含んでいると言えます。¹⁹

18 ラウドについては、ラウドアルミニウス主義 (Arminianism of Laud)、アングロカトリックラウド (Anglo Catholic Laud) と呼ばれました。(Alexander Mitchell, *The Westminster Assembly Its History and Standards* 参照)

19 Samuel Logan, "The Contest and Work of Assembly", 32